全仏

ZENBUTSU
JAPAN BUDDHIST FEDERATION

仏暦2568年3月
[2025年]

No.665

特集

終戦から80年 戦争を語り継ぐ
～核兵器のない世界を目指して～

全仏 665 号

CONTENTS

特集1

インタビュー

終戦から80年 戦争を語り継ぐ ～核兵器のない世界を目指して～ …… 3

被ばく者の声を語り継ぐ　西浩孝（編集室　水平線）

曾祖父の体験を語り継ぐ　髙垣慶太（赤十字国際委員会ユース代表）

特集2

仏教に関する実態把握調査（２０２４年度）の概要 …… 14

加盟団体からのお知らせ

【高野山真言宗】
金剛峯寺、壇上伽藍の堂舎群が国の重要文化財に指定 …… 18

【真言宗須磨寺派】
阪神・淡路大震災から30周年の法要厳修 …… 19

本会からの報告 …… 20

就任のご挨拶

公益財団法人 全日本仏教会 第36期理事長
日谷　照應

この度、池田行信理事長の後任として第36期理事長を拝命いたしました日谷照應でございます。新たに理事長という大任を拝命することとなり、その責任の重さに身の引き締まる思いであります。

まず、私自身が石川県七尾市在住の者として、昨年1月の発生から現在まで、令和６年能登半島地震による被害に対して、多くの皆さまからご支援・ご協力いただいていること、心より御礼申しあげます。また、国内外において大規模な地震や災害でお亡くなりになられた方々に謹んで哀悼の意を表すとともに、いまだ避難生活を送られている方々に心よりお見舞い申しあげます。

さて、本年は大阪にて第47回全日本仏教徒会議大阪大会が開催されます。テーマは「無量のいのち～すべてのいのちを慈しむ～」。これは２０２５年大阪・関西万博のテーマに掲げられた「いのち」について、そのありようを仏教的に深くとらえたものです。昨今の社会を鑑みると、武力紛争・経済格差・環境破壊・差別・貧困など「いのち」が蔑ろにされる事態が世界中で発生しています。その中で、仏教徒として解決に向けて何をすべきか、具体的な行動と方向性を、大会を通して加盟団体の皆さまと共有していきたいと思います。

混迷する世の中で仏教者に求められている職務の重要性を深く認識し、責務を全うできますよう全力を傾注してまいります。皆さまのご理解とご協力を衷心よりお願い申しあげ、就任の挨拶といたします。

特集1　終戦から80年 戦争を語り継ぐ ～核兵器のない世界を目指して～

2025年、第二次世界大戦が終結して80年を迎えます。すでに戦後生まれの人口が9割近くを占める今日、日本において戦争の記憶は遠い過去のものとなりつつあります。しかし、世界に目を向けてみれば、ウクライナやパレスチナなどにおいて紛争が勃発し終息する気配がありません。

釈尊は『ダンマ・パダ（法句経）』でこのようにおっしゃっています。

> すべての者は暴力におびえ、すべての者は死をおそれる。己が身にひきくらべて、殺してはならぬ。殺さしめてはならぬ。（129偈）
>
> すべての者は暴力におびえる。すべての生きものにとって生命は愛しい。己が身にひきくらべて、殺してはならぬ。殺さしめてはならぬ。（130偈）

「己が身にひきくらべて」とは、自分の生命がかけがえのないのと同様に他者の生命もかけがえのないこと、つまり生命存在一つひとつへの想像力を持つことの大切さを説く偈であり、また、戦争において人々を「殺さしめる」国家や軍隊といった巨大な力への厳しいまなざしも想起させます。

生命存在への想像力、それを育む重要な手段は、戦争で亡くなった一つひとつのいのち、一人ひとりの人生があったことを語り継ぐことです。今号の〈特集1〉では、若い世代でそれを実行するお二方にお話しを伺います。

お一人は長崎在住の西浩孝さん。西さんは、2009年に亡くなったジャーナリスト、伊藤明彦氏の著書を復刊するべく奔走し、昨年の12月に第1巻を出版したばかりの編集者です。この伊藤明彦（1936-2009）氏は、まだ原爆の記憶が生々しく残る1970年代に、約1000人の被ばく者の声を記録に残した人物です。自身も被ばく者だった伊藤氏は、当時はまだ重かったレコーダーを抱えて日本全国の被ばく者を訪ね回り、集まった声を複製して、全国の学校や図書館に寄贈するなど、驚嘆すべき業績を残しました。しかし、そのことを知っている人は、地元長崎でも少ないと言います。それを人々に伝えるべく、西さんは復刊にこぎ着けました。

もうお一人、被ばく者の声を語り継ぎ、核兵器の非人道性を世界に発信する髙垣慶太さんを紹介します。髙垣さんは広島出身で、医師だった曾祖父2人がそれぞれ広島と長崎で入市（にゅうし）被爆しました。負傷者が運び込まれても為す術のない悲惨な状況を、祖父母や母親から聞き、中学3年生のスピーチ大会で発表してから、大学時代には核兵器禁止条約の締約国会議において、赤十字国際委員会のユース代表として発言するなど、日本だけではなく、核実験などによって生まれた世界の被ばく者との連帯に取り組んでいます。

約1000人の被ばく者から伊藤明彦氏へ、伊藤明彦氏から西浩孝さんへ、そして読者へ。入市被爆した曾祖父から祖父母や両親へ、そこから髙垣慶太さんを通して世界へ。戦争の非人道性が語り継がれる現場がここにあります。これを読んだ方が一人でも多く、戦争の非人道性を語り継ぐ連鎖に加わり、平和を築くための一歩となることを願っています。

※入市被爆とは、原爆が投下されたときは郊外などにおり、15日目までに爆心地から約2キロ以内に入った人のこと。

特集1

終戦から80年 戦争を語り継ぐ ～核兵器のない世界を目指して～

INTERVIEW 1

被ばく者の声を語り継ぐ

西　浩孝（編集室 水平線）

西浩孝さんへのインタビューに先立って、西さんが現在、復刊しつつある伊藤明彦氏について紹介します。

伊藤氏は1936（昭和11）年東京生まれで、後に長崎に転居しました。原爆が投下されたときは、疎開で長崎を離れていましたが、10日後に自宅に戻り入市被爆しました。

長じて長崎放送に入局し、被ばく者の生の声を伝える『被爆を語る』という番組を企画しました。その番組の担当を外された後、放送局を辞めて、被ばく者の語りをテープに収めるべく全国を渡り歩き、約1000人の「声」を集めました。

詳細は、下の略歴をご覧ください。

伊藤明彦・略歴

1936	東京、杉並に生まれる。
1944	銀行員だった父の仕事の関係で長崎に転居。
1945	長崎への原爆投下時は山口県に縁故疎開していたが、両親や姉たちは長崎市内で被爆。10日後、母に連れられて自宅に戻り、自身も入市被爆。
1968	長崎放送にてラジオ番組『被爆を語る』を企画・提案。同年11月スタート。半年後、佐世保支局への転勤を命じられる。
1970	長崎放送を退職。東京へ出て、日本電波ニュース社に勤務。
1971	民間放送関係者数人に呼びかけて「被爆者の声を記録する会」を結成。被爆者への聞きとり録音を独自に開始。
1972	日本電波ニュース社を退職。
1979	夜警や皿洗いなど早朝・深夜のパート労働に従事しながら、1971年から1979年6月までの8年間で、重さ13キログラムの録音機をさげて、青森県の津軽地方から沖縄県の宮古島まで21都府県の被爆者およそ2000人を訪問し、約1000人の「声」を収録した。
1982	代表的な録音を大まかに編集して複製した、オープンリール版『被爆を語る』（51人分・52巻・約70時間）を全国13カ所の平和資料館・図書館などへ寄贈。
1989	本式の編集をしてナレーションを付けた、カセットテープ版『被爆を語る』（14人分・14巻・約18時間30分）を制作し、1992年までに全国944カ所の平和資料館・国公私立図書館・大学図書館・高等学校図書館などへ寄贈。
2000	原テープ951巻と『被爆を語る』シリーズのマザーテープ82巻、合わせて1033巻を国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館準備室へ寄贈（同館は2003にオープン）。
2006	被爆者284人が語った394話の肉声をつづって被爆の実相を時系列で再現した音声作品『ヒロシマ ナガサキ 私たちは忘れない』（CD9枚組・約8時間40分）を制作し、複製764組を全国の平和運動団体・平和資料館・大学平和研究所・図書館・平和教育や平和運動を実践している大学・高校・中学・小学校の教員・市民運動家など547の団体・施設・個人へ寄贈・贈呈。同年、古川義久氏などの協力者の手によってインターネットでも聴取可能になる。（ウェブサイト「被爆者の声」http://s20hibaku.g3.xrea.com/）
2006	新たにビデオカメラによる取材を開始。500人を目標とし、2年余りで349人を撮影。
2009	体調不良で一時中断。同年3月2日、部屋で朦朧としているのを発見され救急搬送。翌日、肺炎で死去。享年72歳。遺志により葬儀は営まれず献体された。

著書	『未来からの遺言―ある被爆者体験の伝記』（青木書店 1980／岩波現代文庫 2012） 『原子野の『ヨブ記』―かつて核戦争があった』（径書房 1993） 『シナリオ被爆太郎伝説』（窓社 1999） 『夏のことば―ヒロシマ ナガサキ れくいえむ』（私家版 2007）
受賞歴	2001年 平和・共同ジャーナリスト基金賞、「シチズン・オブ・ザ・イヤー」 2006年 日本ジャーナリスト会議賞（JCJ賞）特別賞 2007年 放送人グランプリ特別賞 2008年 吉川英治文化賞

――最初に、西さんが伊藤明彦氏の著作を、全6冊のシリーズ『伊藤明彦の仕事』として復刊するにいたった経緯を教えてください。

原爆や被爆体験の継承というよりも、伊藤明彦がとにかくすごいというのが入り口です。

職業柄、特に用事がなくても本屋があると入るんです。2017年3月のことですが、長崎市内の古本屋の郷土本コーナーで『未来からの遺言―ある被爆者体験の伝記』の文庫版と偶然出会いました。少し変わったタイトルじゃないですか。「被爆者運動の研究」みたいであれば内容が想像できます。ところがタイトルだけだと中身が分からない。サブタイトルでかろうじて原爆関係の本だとわかる。これも職業柄として、関心ジャンルの新刊は大体チェックしています。しかし、この本はノーマークでした。なんとなく気になって買って読んだら、一番の感想は「面白い」。原爆に関する本は、心の準備をして読もうというところがあると思うんです。しかし、この本にはそういうところがない、ミステリーのような内容にどんどん引き込まれていく。

伊藤明彦『伊藤明彦の仕事1　未来からの遺言―ある被爆者体験の伝記／シナリオ被爆太郎伝説』（編集室 水平線　2024）

そして、同時に中身が深い。薄い本ですが、その中にさまざまな考察が含まれています。結果的に実は被爆者ではなかったという人のことを取り上げた内容ですが、記者だと虚構を話していたとわかった時点で普通は書けない。ところが、わかった上で被爆体験、伊藤さんの言葉だと、「被爆者体験」、原子爆弾と人間との関係の本質はどのようなものかということについて、考えを深めていく。

例えばタイトルになっている「未来からの遺言」。私たちは、被爆者の体験を過去の出来事として聞いていると思っていますし事実そうですけれど、伊藤さんは、被爆者が語っている内容は、これから私たちが生きていく中で、もし核兵器が再使用されたり、それに類似した事態が起きた時、こういうことが起きるという未来からの警告だと言います。

また、被爆者が自分が被爆者であるという意識を持つ一番のエポックは、被爆者手帳を取った時だと伊藤さんは言います。そういう場合が多いというのは、他の人も書いているかもしれません。

しかし伊藤さんは、手帳を取る理由が、健康に生きたいなどのきわめて平凡な、人間として押しつぶすことが不可能な理由によると言います。原爆はあまりに残虐で人類の未来に対して破壊的であるため、それを廃絶させようとする人間に人類史的な意味を与える。それゆえ、実際には被爆していない人や、自分の生に意味を見いだせない人が、原爆資料館の展示などを見て、自分の人間らしさ

が傷つけられた、あるいは傷つけられている人を見たとなった場合に、「何十年後かの入市被爆者」となりうるし、その人を非難できないと書いています。そういう見方もユニークだと思います。

それと、原爆と人間の関係において、原爆は人間を滅ぼすもので、人間は被害者というのは自明だと思います。しかし、それは両者の関係における半分でしかない。もう半分は被爆者が原子爆弾を滅ぼすと伊藤さんは言います。被爆者は、端的には命、生き残ったとしても家庭や健康、赤ちゃんがいればその未来を原爆によって奪われてしまう。それを取り戻そうとする行為自体が、原爆を滅ぼしていく過程なんだと。これも深いと思いました。

私が復刊した版の帯に「豊かさ」と書いたのはそういう意味です。非常に複合的、多角的に被爆体験、被爆者体験を捉えている。だから、まずは伊藤明彦がすごいというのが発端です。

――1970年代の8年間に2000人も被爆者を訪問して、約1000人の話を録音したという事実にも頭が下がります。

伊藤さんは、1960年に長崎放送に就職してラジオ記者をやっていました。翌年、浦上（うらかみ）のおばあさんを取材したそうです。そこは、潜伏キリシタンとして生き延びてきた人たちが住む土地です。その人たちの信仰が露見し、迫害を受ける「崩れ」という出来事が、江戸時代から明治にかけて4回ありました。その4番目の浦上四番崩れが最も苛烈で、多くの人が配流され、拷問で殉教しました。流されて帰ってきたことを浦上の信者は「旅」と表現します。伊藤さんが取材したのは、幼児のころに旅に行ったおばあさんでした。しかし、その後すぐにおばあさんは亡くなったらしいです。

伊藤さんはその時、被爆者にも同じことが起きると思ったそうです。その日のために記録をすべきじゃないかと。被爆地は広島と長崎しかない。そこで記者をやっている自分たちが被爆者の声を録音するのは使命だと。そこで1968年に『被爆を語る』という番組を始めました。しかし、労働組合活動が原因で佐世保に飛ばされてしまうんです。

担当できたのは半年。ずっとやっていこうと思っていたのに外されて納得がいかないと、友人の放送関係者数人で「被爆者の声を記録する会」という会を作りました。とはいえ、伊藤さんは長崎放送を辞めたあと東京のニュース通信社に勤めていたのですが、働きながらだと1カ月に2人くらいしか取材できなかった。他の人も同じようにほとんど取材できていない。これでは全然ダメだと伊藤さんは仕事を辞めてしまいます。それからほぼ単独でおよそ2000人の被爆者を訪ねて、約1000人の声を集めました。8年間ですから3日に2人会っているペースです。尋常ではないと思います。

なぜそこまでできたのか。生前の伊藤さんを知る人たちが言うには、最初は意地だったのだろうと。ライフワークとして始めたのに、すぐにやめさせられた。奪われた仕事を取り返してやる、という気持ちですね。ただ、続けていくうちに、その仕事の意味の大きさに気づいていった、というか、確信を深めていった。それで1000人もの話を聞くことができたのではないでしょうか。

これは研究者も言っていますが、1970年代での聞き取りは、かなり先駆的な仕事です。被爆からまだ30年経つかどうかなので、すごく生々しいんです。一方では、それゆえに喋れない人たちもたくさんいました。断られた理由の一部はそういうことです。あるいは差別。被爆者だと明らかになった時に、例えば縁談に差し支えたりする。また、伊藤さんたちが無名の団体だったこと。放送局や新聞社とは信頼度が違います。なんの会か分からないという理由で断られたんです。それでもやめなかったのは本当に貴重な仕事だと思います。

『未来からの遺言』の他に、著書はわずか3冊ですが、それらも後に私は読みました。著書を読み、生き方を知って、とんでもない人だと思い、晩年の伊藤さんと親しかった方に話を聞くと、その存在を知っている人はいまやほとんどいないとのことでした。

私は本を作る人間なので、こういう本が手に入らないのはおかしい、というかもったいないと感じます。被爆体験の継承とか核をどう考えるかという問題を考える時に、非常に重要な人物であり仕事であるにも関わらず忘れられているのは。

また、単純に面白いというのは重要で、頭で原爆とか核廃絶と言うのはどこまでも頭の中だけのことで、こういう本を読むと被爆者や被爆体験を心理の部分で理解できると思います。それで復刊させようと思いました。

――本がすごい、伊藤明彦がすごい、そして伊藤さんが残した仕事を残さねばという順番ですね。西さん自身は、もともと長崎出身だったのですか？

私自身は富山県出身で、大学は東京に進学しました。そのまま東京の出版社に就職し12年半働いていましたが、妻が研究者で当時、就職先を探していましたが、関東だとなかなか厳しく、全国で探して長崎大学に決まったんです。私は出版という仕事にやりがいを感じていましたが、東京を離れることは、出版から離れるのとほぼ同じです。長崎では、最初は東京時代のツテから仕事をもらう形でやっていましたが、やりたい内容が来るわけではありません。出版にギリギリ関わっているという思いだけでやっていました。かといってハローワークに行ってもやりたい仕事がない。やりがいという点ではやはり出版以外にない中、抱えている原稿がありました。とにかくそれを本にしたい、じゃあ一人でやってみようと「編集室 水平線」を立ち上げました。

私は長崎の人間ではなく、来た時もあてがない状態です。そこにたまたま伊藤さんの本との出会いがあって、これは何とかしたいと思いました。引っ越して半年くらいでした。去年の春頃に他の企画が一段落付いて取りかかり、2024年12月に出せたところです。

――奥さまの仕事の都合で長崎に。そこの古本屋でたまたま伊藤明彦の本に出会ったと。私たちの言葉で言う「縁」を強く感じます。

文庫版はもう絶版でしたから、読みたいと思ったら図書館に行くか、古本で手に入れるしかありません。しかし存在そのものを知らなければ、それもできないわけです。だから本当に偶然、おっしゃる通り縁があって、僕は積極的にそれを捉えました。未練を残して東京を去りましたけれど、長崎に来て良いことがあったと思っています。

伊藤さんは、自分のやっている仕事が後世に本当に生かされるかわからないと書いています。1992年までに、複製したカセットテープを

944の図書館や平和資料館に送っているんですが、ほとんど聞かれなかったらしいです。93年の『原子野の『ヨブ記』』を読むと、悲観的な思いが垣間見えます。自分の仕事がなんの役にも立たずに消えていくかもしれない。ただ、時空を超えて自分の魂と誰かの魂が出会うことがあるかもしれない。それを信じたいと書いています。

その一つが、私のケースなんだと思います。今後も、例えば私がこれを復刊した。それを読んで私と同じように感動し、伊藤明彦が残した録音はどんなものだろうとか、なにか取り組み、あるいは勉強し始める人が出てくる可能性があると思うんです。伊藤さんはジャーナリストと紹介されることが多いんですが、私はその言葉を結局使いませんでした。友人宛ての手紙に、ジャーナリストではなくあえて言えば伝達者だと伊藤さん自身が書いているからです。自分は被爆者の声を聞いて、それを伝える存在だと。私もある意味伝達者なのかなと思います。まず被爆者の声を取った伊藤明彦がいて、私は忘れられている伊藤明彦を伝達する。その伊藤明彦が知られたら今度は誰かが被爆者にたどり着くんじゃないか。そのように自分の仕事を捉えています。

――今は、インターネット上でも伊藤さんの仕事を視聴することができますね。

2006年に『ヒロシマ ナガサキ 私たちは忘れない』という9枚組で8時間40分もあるCD作品を伊藤さんは作り、カセットテープと同様に寄贈していました。新聞に欲しい人を求めますみたいな広告を載せたら、それを見た古川義久さんという方が伊藤さんに連絡しました。「これからはインターネットの時代だよ」と。そこで古川さんを中心にネットで発信することになりました。今まで全然聞かれない状態だったのが急にそうなったので、伊藤さんは元気になるんです。伊藤さんが言うには、CDを何百組も寄贈したけど一発だけ大当たりだった、それが古川さんだったと。

そのCD作品で自分の仕事は終わったと思っていたのでしょうが、伊藤さんは意欲を取り戻して、今度は被爆者をビデオで取材しようと、なりました。古川さんたちは、それをYouTubeに上げる作業もしていました。伊藤さんが2009年に亡くなると「NPO法人 被爆者の声」を作って、その仕事を伝える活動をしてきましたが、その古川さんも去年亡くなりました。実動部隊がほとんどいないので、今は私が副理事になっています。今年は被爆80年ですし、この本も出せたので「被爆者の声」のホームページをリニューアルしたいと考えています。今のは古川さんたちが頑張って手作りで工夫して作ったページなので、それを残しつつ今風にしていきたいです。

被爆者の声（URL: http://s20hibaku.g3.xrea.com/）

――著書の中で伊藤さんは、被爆者に話を聞きに行く自分を、原爆投下の犯罪行為を裁くために被害調書を取って歩く「刑事」に例えています。それが終わった後、被爆者の悲しみや怒りの炎を人々に燃ええうつらせる「放火犯」になりたいと言っています。それを受けて西さんは、伊藤さんの「共犯者」になりたいと書いています。改めて西さんにとって、語り継ぐことの意味とはどのようなことでしょうか？

伊藤さんが言っていることが一つです。「未来からの遺言」。つまり、もう一回核兵器が落とされたらこうなるということを、核兵器の再使用を防ぐために語り継いでいかないといけないと思います。

もう一つは、人間らしさを保つためだと思うんです。伊藤さんは、原子爆弾は大量に人をただ殺したのではなく、人間らしくない形で殺したと言っています。それを知っておかないと、人間らしさとはとか、人間らしく生きるとはといったことを捉えられない。原子爆弾の投下は最も著しく人間らしさを破壊したという意味で、今後、核兵器を廃絶しよう、戦争もやめようと言う時に、人間らしさの問題に繋がるのではないかというのが僕の一つの考えです。

西 浩孝
（にし　ひろたか）

1982年、富山県高岡市生まれ。一橋大学社会学部卒業。2004年4月、東京の大月書店に入社。編集者として12年半勤める。2016年9月、家庭の事情で長崎市に移住。2017年4月、「編集室 水平線」の屋号を掲げ、一人での出版活動をはじめる。これまでに、木村哲也『来者の群像―大江満雄とハンセン病療養所の詩人たち』、藤井貞和『非戦へ―物語平和論』『増補新版 言葉と戦争』、大谷良太『方向性詩篇』、渋谷直人『遠い声がする―渋谷直人評論集』『夕暮れの走者―渋谷直人詩文集』を刊行。シリーズ「伊藤明彦の仕事」は、第1巻『未来からの遺言―ある被爆者体験の伝記／シナリオ 被爆太郎伝説』（販売中）、第2巻『原子野の『ヨブ記』―かつて核戦争があった』、第3巻『夏のことば―ヒロシマ ナガサキ れくいえむ』、第4巻『歌集 幾万の黒こげのひと歩みゆく』、第5巻『ヒロシマ ナガサキ 私たちは忘れない』、第6巻『カセットテープ版 被爆を語る』。

INTERVIEW 2

曾祖父の体験を語り継ぐ

髙垣 慶太

――最初に、髙垣さんの現在の活動について教えてください。

赤十字国際委員会(ICRC：International Committee of the Red Cross)という、スイスのジュネーブに本部を置く国際機関があります。武力紛争等によって犠牲となる人々の生命と尊厳を保護することを使命とした、公平で中立、かつ独立した機関です。

締約国会議で発言する髙垣さん　©ICRC

大学1年生だった2019年、ICRCの駐日代表部で、特別にボランティアとして核兵器の問題に取り組むようになりました。2年生になった翌年の2022年、オーストリアのウィーンで核兵器禁止条約の第1回締約国会議が行われた際は、ICRCのユース代表として参加し、これまで私が聞き取りを行った被ばく者の体験を講演で紹介したり、核兵器による被害者にどのような援助が必要か、ICRCとしての提言を会議内で発表しました。

その後、ニューヨークで行われた第2回、第3回の締約国会議にも参加し、ICRCのステートメントを読み上げるだけでなく、各国の同世代と意見を交換する機会にも恵まれました。

早稲田大学では「平和学」を専攻してきました。私のゼミの先生の解説を少し拝借すると、平和学というのは、「何が平和を脅かすのか、その原因を探るとともに、その解決を究明しようとする学問」で、戦争だけでなく、貧困や差別、ジェンダーといった社会的な構造に根ざした「構造的暴力」の分析など、広い範疇を含む学問です。その中でも、私は主に核に関する問題を平和学と関連付けて学びました。

――大学1年生の時から赤十字国際委員会のボランティアをされていたとのことですが、広島の崇徳高校に通っていたときから、そういった活動をされたいと考えていたのですか？

高校生のときには、すでに考えていました。しかし、最初からそうだったわけではありません。

保育園に通っていた頃、平和学習として被ばく者の証言を聞いたり、原爆関係の絵本の読み聞かせがあったのですが、遠足で広島平和記念資料館の見学に行きました。当時の私には、展示の刺激があまりに強く、トラウマになってしまいました。それから原爆や戦争に関して見聞きするのが辛くなってしまったんです。テレビなどでそういった特集が増える8月などは体調が悪くなったり、中学1年生の時には映像を見て過呼吸になるくらいでした。

しかし、中学3年生になった頃、その時期の若者によくあることですが、自分がなんのために生まれたのか考えるようになりました。私の場合、広島という土地に生まれた意義のようなものを考えるようになったわけです。

私には被ばくした2人の曾祖父がいます。2人とも医師だったため、負傷者の治療のために爆心地に入りました。1人は広島で、もう1人は長崎でした。けがや火傷をした人が次々に運び込まれるけれど医薬品が足りないという、いわば最も悽惨な現場です。その体験を、私は祖父母を通じて聞いていました。

そういった曾祖父の話をそれまではあまり聞きたくなかったんですが、中学3年生の全員が取り組むスピーチ大会で伝えようと思ったんです。誰かが伝えなくては、記憶そのものの存在がやがて消えていきます。それは絶対にダメだと思いました。それを伝えるのは、私にしかできない使命だとその時思ったんです。

――確かに、ひいおじいさん2人が被ばく者だった、それも広島と長崎の両都市にお住まいだったというのは、すごい偶然というか、強いご縁を感じます。その後、髙垣さんは崇徳高校に進まれました。崇徳高校は、新聞部がとても盛んで、高校新聞の全国大会でも上位の常連だと聞きます。

広島市は、爆心地から5キロメートル以内に現存する建物を被爆建物として台帳に登録していて、それが現在86件あります。その中の一つに「旧広島陸軍被服支廠」という最大級の被爆建物があるんですが、私が高校2年生だった2019年の冬に、耐震改修にかかる費用を理由に、一部取り壊しを県が提案しました。

被服支廠は、爆心地から2・7キロメートル南東にある鉄筋コンクリート造りの巨大な赤レンガ倉庫群で、分厚い鉄扉が原爆の爆風で歪むなど被爆の痕跡を色濃く残しています。もともと軍服や軍靴、背嚢の生産や保管をしていた施設ですが、これは日清戦争で大本営が置かれ、大陸への派兵基地となった広島が、それ以降、陸軍が駐留したり軍需関連産業が集積することで、「軍都」として発展していったことを示す象徴的な建物でもあります。当時、被服支廠では徴用されたソウルからの朝鮮人労働者も働かされていました。また、原爆が投下された際、赤レンガの目立つ建物だったので、爆心地からたくさんの負傷者が避難し、臨時救護所としても機能しました。

高校時代、新聞部で被服支廠の全棟保存に向けて活動する髙垣さん

原爆というと、とかく悲惨さや被害の側面が語られがちですが、被服支廠は、日本の戦争加害の側面も伝える遺構です。また、広島が軍都であっ

たという、原爆の投下候補地に選定された理由の一端も伝えています。

そういった被爆建物ですから、一部取り壊しを県が公表した時には、全棟の保存を求める声が市民から上がりました。被ばく者が高齢化して少なくなり、直接体験を聞く機会が減る中、このような建物は声なき被爆者として、核兵器の非人道性と、当時の軍の巨大さを、存在そのもので伝えています。そうしたものを議論することなく解体するのはおかしいと思い、新聞部の平和班の班長をしていた私も、この件を精力的に取材しました。その中で、若い人たちにも興味を持ってもらおうと、被服支廠の見学会や、オンラインでの被ばく者との意見交換会などを実施しました。この問題は現在世代だけでなく、被ばく者のいない未来を生きる私たちの世代こそ考える必要があると思ったからです。

この問題は、メディアでも大きく取り上げられ、多くの方の尽力もあり、２０２４年に全棟が重要文化財に指定され、保存される運びとなりました。実際に声を上げ、思いを伝えていくことの重要性を改めて感じました。

――そうした経験を経て、国際会議でも発言されるようになったということですね。今は、原爆ドームや平和記念資料館も海外からの旅行者が多く訪れています。海外の方と交流する機会の多い高垣さんが、異文化の人々に核兵器の非人道性を伝えるときに気をつけていることは何ですか？

大学では、韓国からの留学生の友人たちともよく話します。韓国では、北朝鮮と直接対峙していますから、核兵器は平和ないし安全を維持するために必要なものという世論が近年高まっています。男性は全員兵役に就きますし、そうした切迫感を日本に生きる私たちは経験したことがありません。また、広島長崎への原爆投下が第二次世界大戦を、ひいては日本による朝鮮半島の占領を終わらせたという認識もあります。そうした背景を考えるとき、核兵器の非人道性を伝えていくには、単にその悲惨さ、被害の側面を訴えていくだけではやはり十分ではなく、広島が投下候補地となった経緯、つまり広島が軍都として発展してきた歴史や、朝鮮半島や中国大陸への日本の侵略の側面も伝える必要があります。

また、「日本は唯一の被ばく国」という言い方がよくなされますが、そうではないんです。広島長崎の後にも、現在まで世界中で２０００回を超える核実験が行われてきました。私は、アメリカが１９４６年から12年にわたって67回の核実験を行った、太平洋のマーシャル諸島を訪れたことがあります。第五福竜丸が被ばくしたことで知られるビキニ環礁があるところです。そこで、放射能汚染によって今なお故郷に戻れない人や、健康被害に苦しむ人のお話を伺いました。そうした人々は、中央アジアのカザフスタンやアフリカのアルジェリア、そしてアメリカなど、他にもたくさんいます。

被ばく者は日本だけではなく世界中にいて、今では「グローバル・ヒバクシャ」という言葉でも表現されます。核兵器禁止条約の締約国会議でも、彼らは大きな役割を果たしました。会議に参加することで、もっと大きな核の被害の構造に気づかされましたし、それを日本の若い世代にも伝えていって、世界中の人たちと連帯することが大切だと思います。

――故郷に戻れない、というのは福島の原発事故にも通じる話ですね。

まさにその通りだと思います。確かに広島長崎以降、「戦争では」核兵器は使われてきませんでした。しかし、実験や事故による核の被害は際限がなく容易に国境を越えますし、一度起きてしまうと、その後長く人や社会、環境に傷跡を残します。

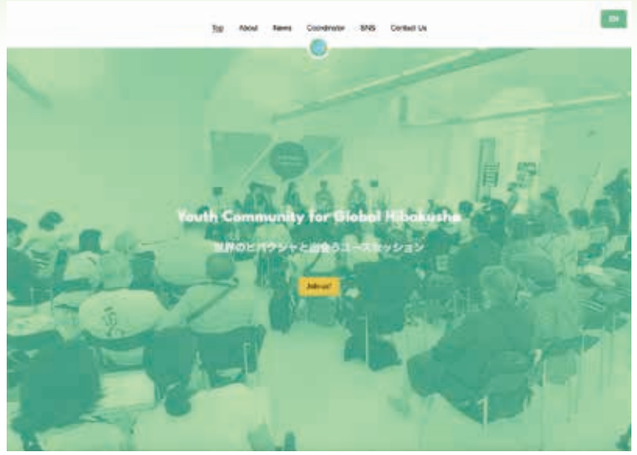
そうした核被害への認識を高め、核兵器や原発の存在が持つリスクについて一人ひとりが考えることのできる社会にしていきたいと考えています。

――昨年、被害者の立場から核廃絶を訴えてきた日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）がノーベル平和賞を受賞しました。

報道を目にしたときは、涙が出るほど感動しました。世界中から被団協の受賞を祝うメッセージも届きました。旧ソ連の核実験場となったカザフスタンの旧セミパラチンスク市出身の友人も受賞を知って涙が出たそうです。核実験で被ばくした家族を持つ友人自身も励まされたと思います。

しかし先ほど、「被団協」と聞いてもわからない人が大学をはじめ、周りには多くいます。平和賞のニュースを聞いて、私の活動が受賞したと思った友人もいたくらいです。

一人でも多くの人に、世界の被ばく者の今も抱える苦痛や想いを知ってほしい。そのような思いから、「世界のヒバクシャと出会うユースセッション」という若者対象のオンライン学習会を、広島で活動する仲間とともに２０２２年から開催してきました。締約国会議で築いた人脈を活かしながら、これまでマーシャル諸島やフィジーの平和活動家、ビキニ環礁での水爆実験で被害を受けた高知の被災漁船員、核に関係する研究者やジャーナリストをゲストに招き、参加者と学習会を重ねてきました。そうした取り組みによって、日本の若い世代と世界の核被害地、活動する人々を繋げていきたいですし、私自身、この問題に興味のない人にどう語っていくのか、そしてどのように問題を解決していけるのか、海外の大学院で学びを深めていきたいと考えています。



世界のヒバクシャと出会うユースセッション【YouthCommunity for Global Hibakusha】のホームページ（https://youth4hibakusha.mystrikingly.com/）

高垣 慶太
（たかがき けいた）

広島市出身。2025 年３月早稲田大学社会科学部を卒業。広島・長崎で原爆救護にあたった２人の曽祖父がきっかけとなり、高校生の頃から新聞部で平和問題を取材。進学後は核兵器禁止条約の締約国会議に赤十字国際委員会 (ICRC) のユース代表として三度出席、世界の核被害について日本の若者が学ぶイベントを開催するなど、国内外で発信に取り組む。現在、東京都立第五福竜丸展示館インターン。

特集2

仏教に関する実態把握調査（2024年度）の概要

大和証券株式会社　広域法人部法人ソリューション課　副部長　佐藤泰之

「仏教に関する実態把握調査」は2017年度より、（公財）全日本仏教会と大和証券株式会社とで共同で取り組んでいる調査・研究事業です。仏教、寺院、僧侶は一般の人たちからどのように見られているのか、何を期待されているのかなど、さまざまな角度から分析を行い、宗派や寺院の取り組みに活用いただくことを目的としております。2024年12月下旬に第6回目の調査を実施しましたので、分析結果の速報を一部ご紹介いたします。

紙幅の都合により深い解説は難しいですが、本編は全日本仏教会のホームページを参照してください。また、説明会を希望する宗派や地域仏教会さまは、全日本仏教会・広報文化部までお問い合わせください。

〈基礎資料〉：調査概要

全日本仏教会　大和証券

◆ 調査目的：　近年の「菩提寺」「寺院」との関わり方や、「葬儀」「納骨・遺骨」への考え方に加え、「災害復興」「女性の関与」「AI」などの関わりについても把握し、今後の寺院としての在り方・取り組みなどにおける基礎資料として活用する。

◆ 調査対象：　マクロミルモニタ20～79歳の男女

◆ 調査地域：　全国

◆ 調査方法：　インターネットリサーチ

◆ 調査時期：　【事前調査】2024年12月19日（木）～12月20日（金）
【本調査】　2024年12月19日（木）～12月20日（金）

◆ 有効回答数：　【事前調査】10,000サンプル　※人口動態で呼集
【本調査】　6,192サンプル（菩提寺あり：3,720サンプル／菩提寺なし：2,472サンプル）

WB後　都心（一都三県、二府二県、愛知）

	男性20代	男性30代	男性40代	男性50代	男性60代	男性70代	女性20代	女性30代	女性40代	女性50代	女性60代	女性70代	合計
菩提寺あり	89	107	147	157	172	177	63	82	113	122	165	198	1,592
菩提寺なし	140	133	167	163	132	119	138	156	206	205	153	163	1,875

地方

	男性20代	男性30代	男性40代	男性50代	男性60代	男性70代	女性20代	女性30代	女性40代	女性50代	女性60代	女性70代	合計
菩提寺あり	67	115	162	141	155	160	93	100	141	134	140	158	1,566
菩提寺なし	101	114	129	95	56	48	100	126	146	97	76	71	1,159

■ウエイトバック（WB）について
今回の本調査について、アンケート回答者の割合が事前調査で得られた各性別×年代の出現率と同じになるようにウェイトバック係数をかけて集計されています。

■時系列について
2017年時の条件をもとに「仏教信者（SQ8=1-11 & SQ9=1-11）」「一般（SQ8=13/17 & SQ9=1-11）」で区分

◆ 調査主体：　公益財団法人 全日本仏教会
大和証券株式会社

1. お寺で取り組むべき社会貢献活動〈図1〉

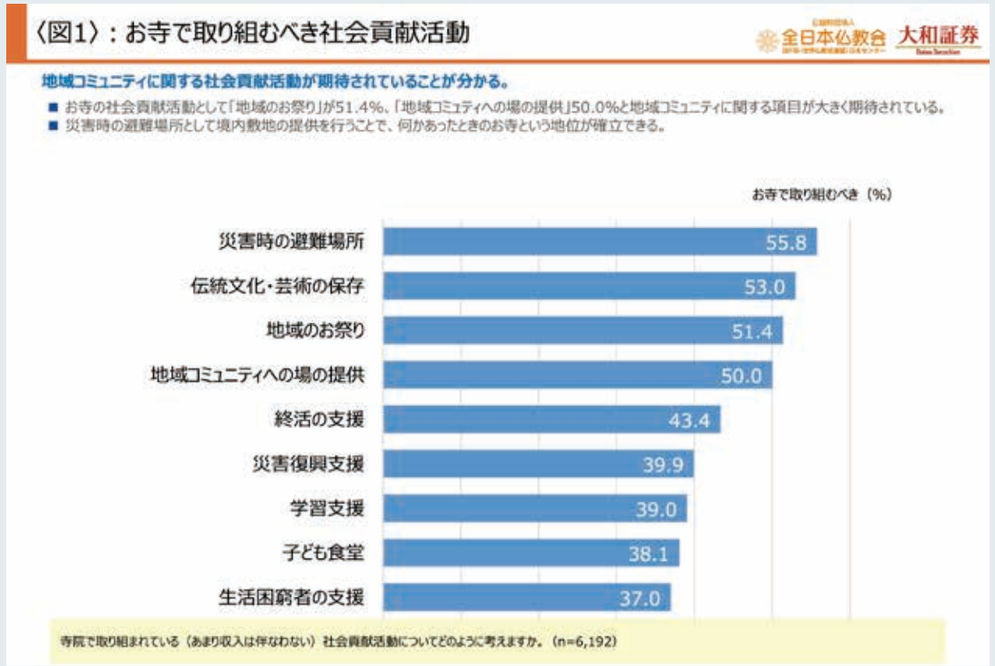
お寺が取り組むべき社会貢献活動の調査結果として、5割を超えた高い数値となっているのは「災害時の避難場所」55・8％、「伝統文化・芸術の保存」53・0％、「地域コミュニティへの場の提供」51・4％、「地域のお祭り」50・0％の4つでした。

ありきたりの話ですが、この結果からみると、お寺の社会貢献活動としては本堂などの活用が望まれているのではないでしょうか。「地域コミュニティへの場の提供」の数値の高さは、都心だけでなく地方でもすでに崩壊しつつある地域コミュニティの再構築に、寺院が中心的な役割として欠かせないとの大きな期待の表れと思われます。

では、地域コミュニティの中心となるためにお寺は何をすべきでしょうか。「お寺が出来ること」ではなく「お寺だから出来ること」は、小さなことから大きなことまで、いろいろあるはずです。坐禅会や仏教の勉強会、花まつりなど皆さまが手掛けている宗教行事を少し拡大することから始めても良いのではないでしょうか。お寺が地域コミュニティの中心になるという期待に応え、寺院の存在感や役割をあらためて地域に示していただくことを願っております。

一般の人は、災害など有事においてお寺を頼りにしていることが「災害時の避難場所」が55・8％という数値の高さからわかります。被災して自宅に留まることが出来ずに困っている人達が避難するわけですが、避難場所としてお寺を開放することは、悩んでいる人、困っている人を救うという仏教、お寺の本来の役割につながるのではないでしょうか。

有事に発生する問題はお寺だけで全てを解決することは出来ないことも多いと思います。しかし、お寺単独ではできないことも、地方公共団体や企業、商店街、医療機関などの外部機関と協働することで、前に進めることが出来るのではないでしょうか。お寺のリーダーシップに期待しております。



2. お寺（仏教）での女性活躍〈図2〉

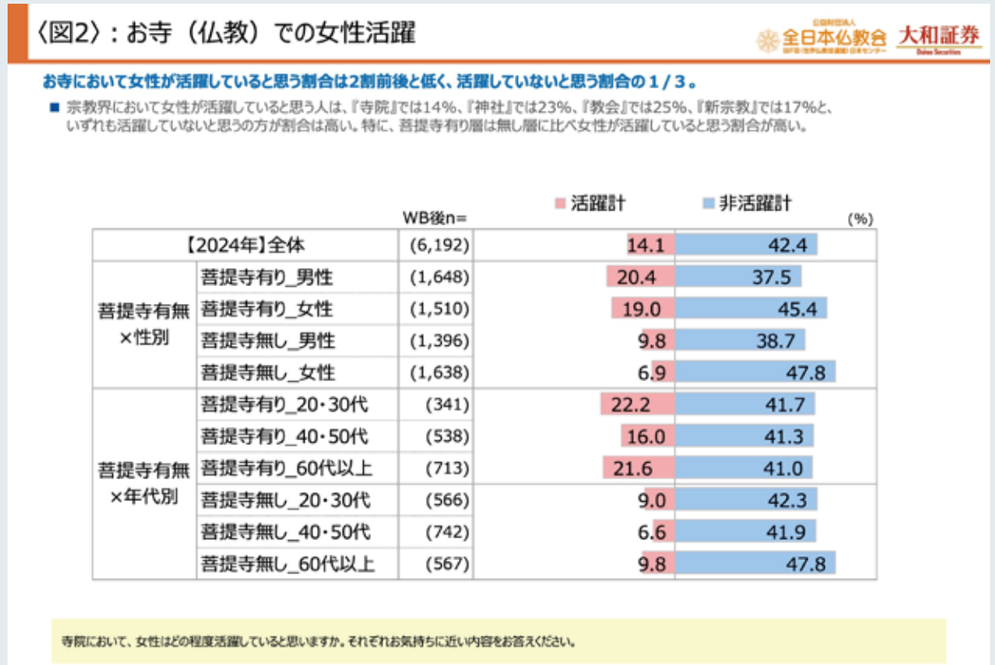
お寺では女性が活躍に関しては厳しい結果が出てしまいました。

宗教界において女性が活躍していると思う人は「お寺（仏教）」では14・1％という低い数値に留まっています。さらに言えば「活躍していないと思う人」は42・4％と「活躍していると思う人」の3倍の数値となっており、一般の人たちはかなり厳しい目でお寺では女性活躍が出来ていないと見ております。

参考までに「女性が活躍していると思う」との回答は「神社（神道）」では23％、「教会（キリスト教）」では25％となっており、「寺院（仏教）」が一番低い結果となっております。

現在の女性活躍に関しては厳しい数値が出た一方で、「これから女性が活躍すること」には少しだけ肯定的に受け取られている側面が見受けられました。

女性が「お寺の住職」であることに関して66％の方が好感度を持って受け入れるという結果です。年代が上がるにつれて好感度



が高まる傾向が出ていることが分かりました。データを俯瞰すると、お寺での女性の活躍については、「今は出来ていないが、今後は活躍を期待している」との思いを持っている方が多いと判断される結果となっています。

それほど機会は多くないのですが、私も宗派や本山、地域仏教会の研修や会議に出席する機会をいただきます。女性で会議のテーブルについている方は本当に少ない印象を受けます。一般企業と比較すると、かなり違和感のある研修や会議として映ります。外部からは仏教は女性を受け入れるだけの土壌が整っていないのではないかと疑問を持たれてしまうような状況ではないでしょうか。

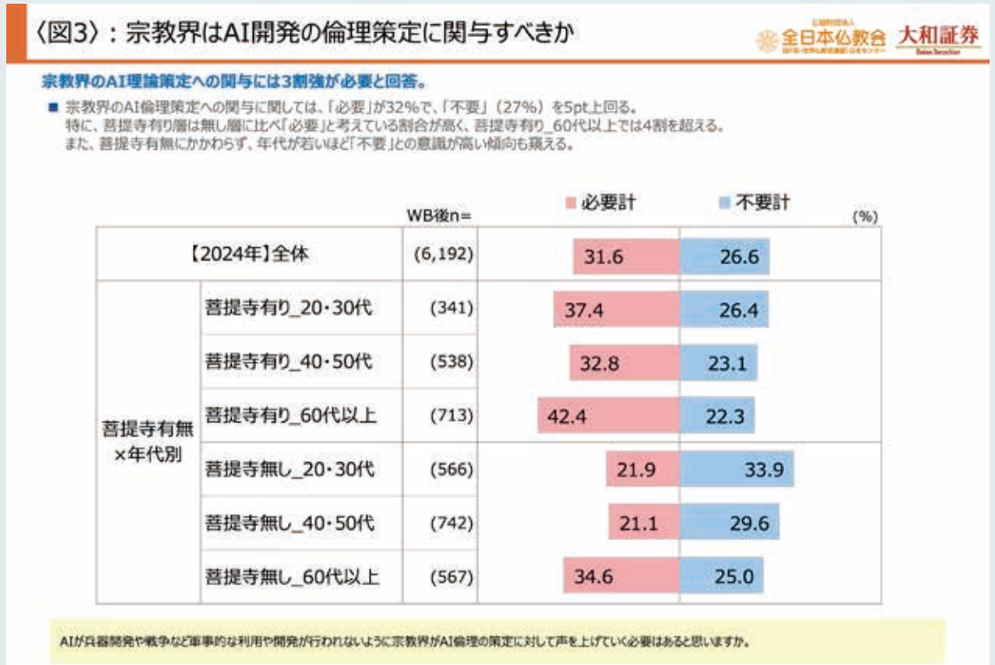
一般の人たちの期待に応えることができるような体制は各寺院、各宗派で整備できているのでしょうか。今後も出来ないのであれば、皆の期待を裏切ることにつながり、お寺に関係する女性だけではなく、一般の女性もお寺と距離を置くようになってしまうのではないでしょうか。

3. 宗教界はAI開発の倫理の策定に関与すべきか〈図3〉

昨今、さまざまな分野において「AI活用」による技術の進歩が目覚ましい状況です。

AI活用に関しては、正しい使い方をすればこれほど力強い人類の智慧はないのですが、一方で戦争や兵器開発にも使われており、今後の開発や活用法にさまざまな問題があることは、大変重い事実です。今回の調査では宗教界がAI開発に提言することが必要かなど、宗教界の新たな役割について調べてみました。

宗教界がAI開発倫理の策定に対して声をあげていく必要があると思う人は31・6%、不要と思う人は26・6%となっており、どちらとも取れない結果となっております。さらに4割強の方は「わからない、どちらともいえない」と考えております。AIの活用について十分理解できていない人が多いことと、そもそも宗教は何が出来るのかわからない人が多いことなどが、その要因と想定されます。



その中で調査結果から傾向を読み取ると、菩提寺の有る人、すなわち仏教と接する機会が多い人ほど、宗教界がAI開発の倫理策定に声を上げる必要性を感じている比率が高いこと、また菩提寺の有無に関わらず年齢が高くなるにつれて必要性を感じる比率が高いことがあげられます。

すでにAIの開発に関して、何らかの活動に取り組んでいる宗派や団体も見受けられます。今後起きうる問題や課題を産業界と共有していくなど、宗派を超えて一層活動を強化していくことは世界の平和につながることです。

新しい技術、特にAI開発に関しては、産官学だけではなく、宗教界も加わり産官学「宗」として正しい方向で進めていく必要があります。AI開発の倫理面に関して宗教界が中心的な役割を担う必然性は高く、今後、より一層重要な立場になると考えられます。

佐藤　泰之（さとう やすゆき）

大和証券株式会社
広域法人部　法人ソリューション課　副部長
1991年大和証券入社、2005年から2023年まで公益法人を担当。
公益財団法人全日本仏教会　第36期総務財政審議会委員、広報委員会委員。
「仏教に関する実態把握調査」2017年度、2019年度、2020年度、2021年度、2022年度の実務を担当。

加盟団体からのお知らせ

【高野山真言宗】金剛峯寺、壇上伽藍の堂舎群が国の重要文化財に指定

2024（令和6）年10月、和歌山県にある高野山真言宗の総本山、金剛峯寺の堂舎群が、国の重要文化財に指定されました。

高野山金剛峯寺は、真言宗の宗祖、弘法大師空海が、紀伊国に開いた真言密教の修行道場です。1000メートル級の深山幽谷に囲まれた山上の盆地にあり、鉄道や道路が整備された今でも、急なつづら折りを登っていかなければ辿り着きません。

大師が、嵯峨天皇から同山を賜ったのは816年。以来、1200年以上にわたり真言密教の聖地として、あるいは弥勒下生の日まで衆生救済のために大師は禅定に入っているという入定信仰の聖地として、存在し続けてきました。「一山境内地」の考えによって、山全体が総本山金剛峯寺であり、塔頭寺院は117にも及びます。

その中で、このたび重要文化財に指定されたのは、金剛峯寺の中核であり、密教の世界観を立体的に具現化した壇上伽藍の諸堂です。近世末に建てられた歴史的価値の高いものとして、御影堂、西塔、山王院拝殿、山王院鐘楼、准胝堂、宝蔵、大会堂、愛染堂、三昧堂の9棟。および、昭和初期の再建で、鉄骨鉄筋コンクリート造の主体部を木部で覆って伝統的な木造寺院建築に見せる、技術的に先進的で優秀なものとして、金堂、根本大塔の2棟。合わせて11棟です。

今川泰伸宗務総長は、「コンクリート造りの金堂と根本大塔が重文に指定されるのは難しいと思っていた。お山すべてを文化財として登録することが、金剛峰寺を護持する最上の方法と考えている。このたびの登録はそのための過程であり、今後もさらに働きかけていきたい」と言います。

高野山は、熊野古道と共に世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の一部でもあります。現在、52の寺院が宿坊を設けていて、それぞれが修行体験や精進料理に工夫をこらしています。ぜひ何度も訪れて、真言密教の奥深さに触れてみてください。

高野山真言宗 総本山 金剛峯寺
〒648-0211 和歌山県伊都郡高野町高野山132
TEL 0736-56-2011
南海高野線極楽橋駅下車、南海高野山ケーブルで高野山駅へ

加盟団体からのお知らせ

【真言宗須磨寺派】阪神・淡路大震災から30周年の法要厳修

2025（令和7）年1月17日、神戸市須磨区にある真言宗須磨寺派の大本山須磨寺で、阪神・淡路大震災の犠牲者追悼法要が営まれました。

阪神高速道路が横倒しになるほどの大きな揺れによって6000名以上が亡くなった大震災からはや30年。まだほの暗い5時半から始まった法要は、堂内でも上着が必要な寒さで、当時の被災者が置かれた環境の厳しさが思い知らされます。発災時間の5時46分には鐘が鳴らされ、参列した人々はそれぞれ思い思いに手を合わせていました。

須磨寺とその周辺も震災によって大きな被害を受け、塔頭寺院などが倒壊し、犠牲となった住職もいました。大火災となった長田区からススが飛んでくる状況の中、須磨寺の客殿は遺体安置所となり、120体ほどのご遺体をお預かりしたといいます。

法要は午前10時からも行われ、多くの人が参列しました。小池弘三管長猊下は、「当時は助かった人同士で『おかげさまで』という言葉も言えなかったですね。じゃあ、亡くなった人には『おかげ』がなかったんかと思ってしまって。亡くなった方の慰霊はこちらに任せて、まずは自分のことを考えてくださいと声をかけていました」とふり返ります。

午後4時からは、同じ須磨寺にて神戸市佛教連合会による追悼法要が行われました。導師をつとめた善本秀樹（浄土真宗本願寺派・順照寺住職）会長のお寺も震災で全壊し、親族が二人亡くなっています。「あの時の叫び声、匂い、埃、今でも思い出します。言葉では表現できません。30年というのは大きな地震が来た時のために、避難場所を提供し、物資を受ける協定を神戸市と結ぶつもりです」と会長は言います。

法要後、震災の語り部として順照寺門徒総代の池本善一氏が当時をふり返りました。続いて、震災後に復興を願って作られた「しあわせ運べるように」を、須磨寺が発祥の一絃琴の音色に合わせて全員で斉唱しました。

真言宗須磨寺派 大本山 須磨寺（上野山 福祥寺）
〒654-0071 兵庫県神戸市須磨区須磨寺町4-6-8
TEL 078-731-0416
JR神戸線「須磨駅」下車　徒歩15分
山陽電鉄「山陽須磨駅」下車　徒歩13分

シンポジウム「大正新脩大蔵経の100年 SATの30年」を開催

令和6（2024）年12月21日（土）、東京大学、本郷キャンパス内の山上会館において、シンポジウム「大正新脩大蔵経の100年 SATの30年 生成AIと仏教研究」が開催されました。

大蔵経運営事業は、本会の公益目的事業の柱の一つであり、SAT大蔵経テキストデータベース研究会、日本印度学仏教学会、日本仏教学会と共に大蔵経研究推進会議を設置して進めています。この度のシンポジウムは、SATが主催し、本会が後援する形で開催されました。

近年、爆発的な進化を遂げている生成AIを、仏教研究においてどのように活用していくかという問題意識のもと、第1部は、SATの代表で東京大学名誉教授の下田正弘先生による「大正新脩大蔵経の歴史とSATの将来：AIと仏教研究」と題した講演で始まりました。大蔵経の概説と、SATによる大正蔵のデータベース化事業がデジタル人文学を牽引し、国際標準の策定にも大きく寄与したこと、さらにAIを導入することで令和大蔵経の編纂まで見据えていることが語られました。

次に、大蔵経テキストデータベースの発展を牽引してきた、人文情報学研究所主任研究員の永崎研宣先生による「SATの現在：大蔵経画像を用いた令和大蔵経編纂に向けて」が続きます。

第2部では、インド哲学、仏教学に留まらず、広く人文学において生成AIが持つ可能性について、まず東京大学でデジタル人文学を主導する大向一輝先生によって、「人文学研究とAI：現在・課題・展望」と題したAIの概説が講義されました。大向先生は、人文学においてAIは研究者が得意ではないタスク、例えば多言語間の翻訳などを代替するのに役立つが、AIが自律的に問題を解くわけではないこと。またその結果の正当性をどう評価するか、AI技術の内実を知ることが大事だといいます。

続いて、西洋古典学を専門とする名古屋大学の岩田直也先生による「西洋古典特化型AI「ヒューマニテクスト」の現状と展望」と題した講義です。現在、プラトンやアリストテレスといった西洋古典に特化したAI「ヒューマニテクスト」が開発されています。プロジェクトを率いる岩田先生は、この開発によって検索精度が大幅に向上し、さらに西洋古典に限らずデータベースを拡充することで、領域横断的な研究の推進を見据えているといいます。生成AIプロジェクトを率いる、永崎先生による「仏教研究におけるAI活用」と題した講演の後に、パネルディスカッションが行われ、活発な質疑応答がなされました。

今年から10年間、大正新脩大蔵経が編纂されてから100年の節目を迎えます。本会は仏教における大正蔵の意義を伝えるべく、引き続き取り組んでまいります。

第3回法人創立70周年記念事業実行委員会

日　時：令和6年12月6日（金）14時～
会　場：本会会議室（オンライン併用）
出席委員：
伊藤道仁（曹洞宗）
渡邊弘文（浄土真宗本願寺派）
石井正道（真宗大谷派）
坂詰秀正（日蓮宗）
並木泰淳（臨済宗妙心寺派）
西村智秀（天台宗）
吉田真澄（真言宗豊山派）
熊田秀海（福島県仏教会）
鈴木義俊（山梨県仏教会）
茶円宥勝（島根県仏教会）
小川淳詩（（公財）仏教伝道協会）
掬池友絢（学識経験者）
加藤京子（学識経験者）
村瀬友洋（学識経験者）
鈴木健太（学識経験者）
金原円応（学識経験者）

【概要】
定刻にて開会。和田学英事務総長のもと三帰依文を唱和、続き挨拶。その後、委員長が議長となり議題に沿って進行しました。まず、事務総局より第44回理事会における結果について報告され、続き、委員間にて今後の検討課題について意見が交換されました。

第36期第3回総務財政審議会

日　時：令和6年12月19日（木）14時～
会　場：本会会議室（オンライン併用）
出席委員：
安藤道隆（曹洞宗）
東森尚人（浄土真宗本願寺派）
藤田哲史（真宗大谷派）
笠井照永（日蓮宗）
竹井成範（高野山真言宗）
坂本圭司（天台宗）
杉本栄次（真言宗智山派）
藤原静海（真言宗豊山派）
吉田泰樹（東京都仏教連合会）
遠賀令子（（公社）全日本仏教婦人連盟）
佐藤泰之（学識経験者）
蓑輪顕量（学識経験者）
オブザーバー：
長谷川正浩（顧問弁護士）
大島義則（顧問弁護士）
出席理事：
戸松義晴（浄土宗）
加久保範祐（真言宗智山派）
吉田明良（和宗）
軽部浩史（愛知県仏教会）

【議題】
諮問①『法規集』の見直しについて
諮問④本会の理事長及び事務総長の選定に関する「要望書」について

【概要】
定刻にて開会。藤田委員長のもと三帰依文を唱和、続き挨拶。その後、委員長が議長となり議題に沿って進行しました。第36期の諮問事項である諮問①および諮問④について委員間にて意見を交わしました。

第36期第3回社会・人権審議会

日　時：令和6年12月25日14時～
会　場：本会会議室（オンライン併用）
出席委員：
我孫子高宏（曹洞宗）
岡田光恵（浄土真宗本願寺派）
杉浦拓己（浄土宗）【委員代理】
赤堀正明（日蓮宗）
谷明生（臨済宗妙心寺派）
森定慈宏（天台宗）【委員代理】
荒井真道（真言宗智山派）
小林政彦（真言宗豊山派）
オブザーバー：
長谷川正浩（本会顧問弁護士）
大島義則（本会顧問弁護士）

【概要】
三帰依文を唱和の後、和田学英事務総長の挨拶。続いて、浄土宗の伴　乃昶委員が長谷川岱潤委員に交代したことを報告し、36期の諮問③「過去帳」等の取扱いについて審議に入りました。過去帳開示問題における各宗派の状況を出席委員から報告いただきました。

第36期第4回総務財政審議会

日時：令和7年2月13日（木）14時～
会場：本会会議室（オンライン併用）
出席委員：
安藤道隆（曹洞宗）
東森尚人（浄土真宗本願寺派）
藤田哲史（真宗大谷派）
竹井成範（高野山真言宗）
細川晋輔（臨済宗妙心寺派）
坂本圭司（天台宗）
藤原静海（真言宗豊山派）
吉田泰樹（東京都仏教連合会）
佐藤泰之（学識経験者）
蓑輪顕量（学識経験者）
オブザーバー：
長谷川正浩（顧問弁護士）
大島義則（顧問弁護士）
出席理事：
里雄康意（真宗大谷派）
戸松義晴（浄土宗）

加久保範祐（真言宗智山派）
吉田明良（和宗）
軽部浩史（愛知県仏教会）

【議題】
諮問①『法規集』の見直しについて
諮問④ 本会の理事長及び事務総長の選定に関する「要望書」について

【概要】
定刻にて開会。藤田委員長のもと三帰依文を唱和、続き挨拶。その後、委員長が議長となり議題に沿って進行。第3回に引き続き、第36期の諮問事項である諮問①および諮問④について委員間にて意見を交わし、法務執行に関する協議会規程廃止案、法人創立70周年記念事業計画基本規程中改正案に関する答申案ついて賛否を諮り承認されました。

第46回理事会

日　時：令和7年2月21日（金）14時～
会　場：本会会議室（ハイブリッド会議）
出席委員：
和田学英（曹洞宗）
池田行信（浄土真宗本願寺派）
日谷照應（浄土真宗本願寺派）
里雄康意（真宗大谷派）
戸松義晴（浄土宗）
秋山文裕（日蓮宗）
舩戸俊宏（天台宗）
守山雄順（聖観音宗）
岡野正純（孝道教団）
三吉廣明（東京都仏教連合会）
石原伸俊（岡山県仏教会）
花岡眞理子（公社）全日本仏教婦人連盟）
出席監事：
平井良昌（（一社）仏教情報センター）
木村匡成（公認会計士）
オブザーバー：
大島義則（顧問弁護士）

【議案および報告】
議案第1号
定款第22条第2項の定めによる理事長の選定について承認を求める件
議案第2号
2025（令和7）年度事業計画案について承認を求める件
議案第3号
2025（令和7）年度収支予算案について承認を求める件
議案第4号
2025（令和7）年度資金調達及び設備投資の見込みについて承認を求める件
議案第5号
法人創立70周年記念事業計画基本規程中改正案について承認を求める件
議案第6号
法務執行に関する協議会規程廃止案について承認を求める件
報告事項第1号
理事長の職務執行状況

【概要】
池田行信理事長の辞任に伴う議案として、定款第22条第2項の定めによる理事長の選定が上程され、日谷照應理事が後任の理事長に就任することが出席理事の賛成により承認されました。続く議案として、2025（令和7）年度事業計画（案）、2025（令和7）年度収支予算（案）、2025（令和7）年度資金調達及び設備投資の見込み、法人創立70周年記念事業計画基本規程中改正案、法務執行に関する協議会規程廃止案が上程され、出席理事の賛成により承認されました。また、報告事項では理事長の職務執行状況として各部の事業について報告しました。

インド共和国記念76周年式典

日　時：令和7年1月27日（月）
会　場：インド大使館（東京都千代田区九段南2―2―11）
出席者：
富岡孝彰（本会国際部部長）
位田樹音（本会国際部次長）

【概要】
インドは、お釈迦さまが生誕し仏教を開かれた地であり、インド大使館とは仏教を通じた交流をこれまでも折に触れて重ねてきました。この度、インド大使館よりインド共和国記念76周年式典の招待があり、本会国際部2人で出席しました。

最初に、日本とインド両国の国歌斉唱が行われ、続き日印協会会長の菅義偉元総理や、林芳正内閣官房長官、岩屋毅外務大臣、また静岡や山梨の県知事といった日本の要人が壇上に上がり、紹介されました。その後シビ・ジョージ駐日インド大使、次いで日本の要人からそれぞれ挨拶がありました。どの方も日本とインドの経済や国家安全上の連携の重要さを説き、また文化交流の有意義さを説きました。

その後、立食形式でインド料理が振舞われました。神戸・大阪インド総領事のチャンドル・アッパル氏を紹介いただき、お互いの心が、仏教を介した日印相互の発展にあることを、改めて確認し合いました。他にもインド大使館のディラジ・ムキア公使など初対面の方にも、日本仏教の紹介をいたしました。政界、財界、防衛関係者が多数を占める中、日本の僧侶も何名か招待されており、その活気はそのまま、日本とインドの友好と国交の盛んなさまをあらわしているようでした。

「救援基金」寄附者一覧

【2024（令和6）年12月1日～2025（令和7）年2月28日】
（時系列順・敬称略）
兵庫県佛教会
曹洞宗
福岡県仏教連合会
長岡市花祭奉讃会
大乘院檀信徒一同
東京都仏教連合会
総本山　仁和寺
水口地区佛教会
スガイ　タケヒロ
匿名希望5件
総計　2，067，430円

「賛助会員」新規入会者一覧

【2024（令和6）年12月1日～2025（令和7）年2月28日】
（時系列順・敬称略）
〈法人会員〉
三信電気株式会社
特定非営利活動法人　ジャパンハート
〈個人会員〉
立憲民主党　衆議院議員　小山 展弘
乗松 奈津子
ご入会、誠にありがとうございます。

賛助会員募集

本会では賛助会員を募集しております。全国のご寺院をはじめ、企業や団体、個人としてご入会いただけます。入会等の詳細は本会webサイトをご覧ください。

第9回花まつりデザイン募集

応募締切
2025年
9月30日(火)
まで
※当日消印有効

募集要項

第8回花まつりデザインを使用したポスター・絵はがき

ポスター大賞作品（一般）

ポスター大賞作品（満12才以下）

絵はがき大賞

応募資格
プロ・アマチュア問わず、すべての方に応募いただけます。
（ただし、作品採用の場合、修正や転用に応じられること）

応募条件
未発表のオリジナル作品で、仏教行事である「花まつり」を題材として自由に作品を描いてください。なお、作品に文字は入れないでください。
（例：お釈迦さまに甘茶をかける場面、ご誕生をお祝いする場面、寺院の行事やイベントの場面など）

作品規定
素材・画材・技法は自由（デジタル作品も可）、立体物は不可
応募する作品は、下記のサイズを参考に制作してください。（複数応募可）

●募集作品サイズ●	用　　紙：A3サイズ以上（297mm×420mm 以上） デジタル：300dpi以上（15MB 以上、5000×7000ピクセル 以上）

審査方法
11月に審査会を開催し、大賞作品には主催者より連絡します。
審査に関しての電話やメールでの問い合わせはご遠慮ください。

応募方法
本会webサイトより応募用紙をダウンロードし必要事項を明記の上、1作品につき1部同封してください。作品は折り曲げずに（筒状は可）郵送してください。
（デジタル作品もカラー出力後、郵送にて受付となります。）

作品送付先・お問い合わせ

公益財団法人 全日本仏教会 広報文化部
〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館2階
TEL:03-3437-9275　FAX:03-3437-3260　E-mail:kouho@jbf.ne.jp

全日本仏教会　検索
https://www.jbf.ne.jp

公益財団法人
全日本仏教会
WFB（世界仏教徒連盟）日本センター

発行人　和田学英
発行所　公益財団法人 全日本仏教会
〒105-0011　東京都港区芝公園4-7-4 明照会館2階
TEL：03-3437-9275　FAX：03-3437-3260
e-mail：info@jbf.ne.jp
2025年3月31日発行　第665号